

特集

# 新春座談会を開催

1月23日、相馬村農協本所役員室において、関東地区の取引市場役員らを招いて新春座談会を開催しました。

座談会の開催に先立ち、三上代表理事組合長は「アベノミクスの効果やTPPの問題、さらには消費税増税など、これからはさまざまな課題がある。今後の情勢などを踏まえながら、皆様の忌憚の無い意見を伺いたい」とあいさつ。

その後約1時間強にわたり、市場役員と当JA、および全農あおもりとの意見交換が行われました。





「日本最大の青果卸売市場」

東京青果株式会社 常務取締役 鳥津 忠安 殿



モットーは「感謝・奉仕・誠実」

東京千住青果株式会社 常務取締役 高橋 清二 殿

今回の座談会は、「これからの日本農業の展望」という大きなテーマを設け、その中に存在する「担い手不足」や「耕作放棄地」といったさまざまな問題を広い視野でとらえた上で、その先に存在するりんごを始めとする果物の消費について対話形式で行いました。現在の農業は前述の担い手不足はもちろん、青果物の消費減少やTPPの問題など、いろいろな課題を抱えています。限られた時間の中ですべてを議論することは困難ですが、この座談会の中で話題に上がった事柄についてまとめました。

——市場の情勢はどうですか？そして農業情勢についてどう考えますか？

産地の情勢は高齢化、そして担い手不足という問題があります。日本の人口は減少することが確実視されています。それに対して、世界的にみると人口は70億から90億に増えていく。食糧危機の問

題が出てきています。その中で、日本の政府の考え方は農業の規模拡大ですが、いざ労働力があるのかといえ、高齢化と担い手不足で労働力不足に苦しんでいる。現状と政府の方向にはギャップを感じます。

その一方で、市場周りも大きく変わってきています。例えば量販店では、コンビニエンスストアの比率が高くなっており、その中

青果物の取扱量が増えています。1件あたりの単価は小さいですが、店の数で勝負できているような感じがあります。また、関西方面で2社ほど市場が廃業しており、市場そのものも必ずしも安泰とはいえません。

産地の皆さんと話し合いながら、お互いに生き残っていく道を探していくことが必要であるというところが市場側の見解でした。

日本の農業が抱えている問題

- ①生産者の高齢化
  - ②担い手不足
  - ③耕作放棄地の増加
  - ④TPPへの参加
- ・・・など





### 野菜や果物は「大地からの贈り物」

金港青果株式会社 代表取締役専務 福島 秀平 殿



### 卓へ、確実かつ安心に「美味」の橋わたし

東京多摩青果株式会社 常務取締役 楠本 勘 殿

— TPPの問題もありま  
すが、国際競争力の強  
化などについてはどう  
考えますか。

この設問については、日本とヨーロッパ・ニュージーランドとのりんごの反収の比較が行われ、「揃ったりりんごを多く作る」こと、かつ「反収を上げる」ことが大事なのでは、という意見がありました。

J A相馬村ではかつて中生種りんごが35%ほどあり、この数を早生種の「つがる」と晩生種の着色系ふじへ移行させたという事例が紹介され（農業緊急推進強化策）、「産地は組織で作る」という意識の重要性が強調されました。

— 時代の流れの中で、T  
PPの発動前に競争が  
はじまるのでは。

外国産りんごの参入に対する危機感も聞かれました。りんごの周年販売に向けて有袋ふじの栽培を

奨励しているが、生産者においてしてもなかなかりんごに袋をかけてくれない。対策として、原箱1箱あたり100円の補助金交付を打ち出しても、それでも生産量の減少に歯止めがかからない：：こういった流れでは海外のりんごが参入する隙を与えてしまう。一度参入する機会を与えてしまうと、単価高になったときには国産品が品薄になる期間以外でも外国産りんごが市場に流通してくるのでは、という不安感が農協側から上がりました。

一方で市場側からは、「海外の厳選された品物が日本に入ってくるならば驚異だが、そういった物は日本全国探してもない。それに、日本人はちゃんとした感覚を持っているから、値段だけで消費者は動くかといえ、非常に疑問に感じる。これは平成10年のバブル崩壊後の価格破壊傾向を、消

費者が否定したことが証明している。現実として、輸入野菜・輸入果物の占有率を40年近く見ているが、未だに10%を超えたことが無い。販売にあたって大前提は品質の良さだが、それを輸入品に頼らなければいけないのかといえ、そうではない。メディア・マスコミのとらえ方を精査して吸収しなければ、大変な錯覚を引き起こすことになる」という声が聞か





青森の農業を応援します

J A全農あおもり りんご部 部長 黒滝 英樹

J A相馬村 ・代表理事組合長 三上 道廣  
 ・専務理事 大場 勉  
 ・指導販売部次長 三上 悟行

れました。

——高齢化・後継者の問題  
 についてはどう考えますか。

産地（生産者）の高齢化による担い手不足が取りあげられますが、同じことは市場でも同じようです。「今の担当者は長くやってもらっているから安心だけれど、次の世代の担当者は大丈夫だろうか？」「若い担当者には、販売の歴史背景などを知っている人が教えていかなければならない」ということが市場側・農協側の共通認識でした。

——果実の消費が伸び悩んでいますか…

生果の消費量が全体的に減少傾向ですが、これは特に百貨店での、いわゆる「スイーツ」の流行。添えられている少量の果物を食べて「果物を消費した感覚」になっているのが大きいと感じます。そし

て総務省のデータによると、一番果物を食べていないのが20代。「親が食べないから子供も食べない」という最悪な構造になっている。「食育」を通して果物を食べることを啓蒙していかないと、果物の消費は伸びていかないのではないかと市場側は危惧しています。

〈おわりに〉

今回の新春座談会では市場情勢の他にも、トップセールスに対する行政側と市場側の認識の違いなど、たくさんの貴重なお話を伺うことができました。取引市場役員の皆様におかれましては、ご多忙な中新春座談会に出席していただき、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

各取引市場の詳細情報はこちらからどうぞ。

- 東京青果株式会社 <http://www.tokyo-seika.co.jp>
- 東京千住青果株式会社 <http://www.tokyo-senjuseika.jp>
- 東京多摩青果株式会社 <http://www.tamaseika.co.jp>
- 金港青果株式会社 <http://www.kinkoh-fresh.co.jp>
- J A全農あおもり <http://www.am.zennoh.or.jp>